

米国大統領選 10

初回討論会でロムニー候補が圧勝、選挙戦は最終盤で大接戦に転じる

10月3日夜に開催されたオバマ大統領とロムニー候補による候補者討論会は、大方の予想に反してロムニー候補が圧勝した。同候補は、討論会直前まではオバマ大統領にリードを広げられて後がなくなっていたが、討論会では最高に近い成績を挙げて形勢を挽回した。討論会後に実施された全米対象の世論調査の多くではロムニー候補の支持率がオバマ大統領を僅差だが逆転した。州単位の討論後の世論調査でも、オバマ大統領が優勢になっていた接戦州でのロムニー候補の挽回が目立つ。

主な選挙予測のメディア・機関によれば、現時点でも選挙人獲得予想ではオバマ大統領が一定のリードを保ち、選挙予測の大半も3分の2程度の確率でオバマ大統領が再選されるとみている。我々も相対的には引き続きオバマ大統領の再選の可能性が高いとは考えている。だが、10月16日と22日の大統領候補討論会でも大統領が精彩を欠くようなら、ロムニー候補が11月6日の投票日まで形勢を逆転する可能性は十分にあり、その時には上記予測が雪崩を打つようにロムニー候補が優勢との見方に傾くだろう。投票日まで残り4週間弱という最終盤の今、選挙戦は再び大接戦に戻っていることを認識し、11日の副大統領候補討論会も含めた三回の討論会、8%を割った失業率など一部に明るさもある経済情勢と、それぞれに対する有権者の反応を注意深く観測し続けることが、今まで以上に重要になってくると思われる。

1. 最初の討論会はロムニー候補の「歴史的な圧勝」

11月6日の米大統領選に向けた初の候補者討論会が10月3日夜にコロラド州デンバーで開かれた。前回報告したように、討論会直前までは複数の接戦州においてオバマ大統領のリードが拡大して優勢が強まり、ロムニー候補は討論会で挽回できなければ後がないという正念場に立たされていた。専門家の中には、準備に時間を割ける挑戦者が一般的に有利でありロムニー候補は善戦するとの見方もあったが、それまで失言等が目立っていたロムニー候補はチャンスを活かさないのはいかとの見方が多かった。世論も、討論会はオバマ大統領が勝つとの予想が大勢になっていた。それでも討論会への関心は高く、当日の視聴者数は6,800万人近くに達した。

しかし、世論は討論会¹はロムニー候補の圧勝であったとの判断を下した。ギャラップ社が10月4-5日に実施した世論調査²によれば、討論会を視聴した有権者のうちロムニー候補の勝利とする回答が72%に対してオバマ大統領はわずか20%、両者の差は52%ポイントの圧倒的な差になった。同社によれば、過去の候補者討論会では92年のクリントン元大統領のブッシュ元大統領に対する42%ポイントが最高であり、今回は、それを上回る調査史上の最大の差であるという。ピュー・リサーチ・センターが10月4-7日に実施した世論調査³でも、ロムニー候補の勝利との回答が66%に対してオバマ大統領は20%にとどまった。討論会直後のCNNやCBSニュースによる緊急世論調査でも、それぞれ72%対25%、46%対22%という大差がついていたが、ロムニー候補の勝利という認

¹ 討論会の映像、筆記録は下記 URL から参照できる。

(映像) http://www.youtube.com/politics?feature=etp-gs-ype&hl=en&uid=Rhad9Ho4_YmB4pTuAjSr2g

(筆記録) <http://www.cnn.com/2012/10/03/politics/debate-transcript/index.html>

² October 8, 2012, Romney Narrows Vote Gap After Historic Debate Win
By record-high margin, debate watchers say Romney did better, by Jeffrey M. Jones
<http://www.gallup.com/poll/157907/romney-narrows-vote-gap-historic-debate-win.aspx>

³ MONDAY, OCTOBER 8, 2012, GOP Challenger Viewed as Candidate with New Ideas
Romney's Strong Debate Performance Erases Obama's Lead
<http://www.people-press.org/files/legacy-pdf/10-8-12%20Political%20Release.pdf>

識が翌日以降にさらに有権者の間に広がったことが分かる。

こうした世論調査の結果を待たずとも、討論会を半ばまでみればロムニー候補の勝利は明らかだった。討論会を中継していたテレビ各局では、早くから多くの解説者が、ロムニー候補の発言は歯切れがよく、力強く攻撃的、熱意が感じられると語る一方、オバマ大統領に対しては、心ここにあらずの様子で熱意がない、発言の歯切れが悪く、防戦に走りがちだと酷評していた。その傾向は討論の最後まで変わることなく、保守系メディアと識者は歓喜に沸く一方、リベラル系メディアと識者は悲壮感が漂い、「オバマ大統領はいったいどこに行ったのだ」などと嘆く声が上がっていた。

2. 全米の支持率は、ロムニー候補の討論会圧勝で大接戦に戻る

ロムニー候補の3日の討論会での圧勝は、選挙情勢も大きく変えた。全米単位で調査期間が討論会後の世論調査の多くは、討論会前の調査に比べてロムニー候補の支持率が軒並み上昇、逆に支持率が下がったオバマ大統領と並ぶか逆転し、一部調査ではリードが4%ポイントに達するという衝撃的な結果になった。RCP（リアルクリアポリティクス社）が発表している主要世論調査平均によれば、討論会後の調査結果に集計対象の大部分が切り替わった10月9日にロムニー候補の支持率がオバマ大統領を逆転、10日にはロムニー候補のリードが1.5%ポイントに拡大している。ロムニー候補のリードは実に1年ぶりのことである。

図表1 オバマ大統領とロムニー候補の支持率の推移（%, 主要世論調査平均）



(資料)Real Clear Politics.

世論調査の専門家によれば、これまでの大統領選でも討論会後の両候補の支持率差が2~3%変化する「討論会効果」は生じたが、それは短期間で消滅することが多かったという。今回も、同じ変化はギャラップ社の同調査（選挙登録済み有権者（RV）が対象）に表れている。同社によれば、討論会前のオバマ大統領の5%ポイントのリードが討論会直後（10月4-6日）に同率で消えたが、最近（10月7-8日）は再びオバマ大統領の5%ポイントのリードに戻ったという。これはロムニー候補からみれば、一時は5%ポイント生じた「討論会効果」が週明けには消滅したことになる。ラスムセン社の同調査（投票予定有権者（LV）が対象）でも、一時は4%ポイントに拡大した「討論会効果」が最新調査では3%ポイントに縮小している。二つの調査から分かるのは、有権者が討論会はロムニー候補の圧勝という評価を下した割には、「討論会効果」はやや大きい程度であり、しかも過去と同様に消えつつある可能性が高いことである。

以上の主要世論調査平均でみたロムニー候補の1%強のリードと、やや大きく出た「討論会効果」が縮小しつつある現状という二つの動きを総合的に評価すれば、討論会を経て、今では全米の支持率で見た選挙戦は、ほぼ互角の大接戦になっていると判断してよいだろう。

3. 選挙人獲得予想でもオバマ大統領のリードは縮小、しかし優勢は維持

前回報告では、オバマ大統領が選挙人獲得予想において、複数の接戦州においてオバマ大統領のリードが拡大したために、ロムニー候補に大差をつけていると述べた。しかし、3日の討論会でのロムニー候補の圧勝を受けて、討論会後に世論調査を実施した接戦州でも下記のように、オバマ大統領のリードは全て縮小、ノースカロライナ州とバージニア州では逆転という結果が出ている。この結果を受けて討論会の前にはRCPがオバマ大統領の優勢と評価していた4州のうち3州が接戦の評価に変わり、選挙人獲得予想はオバマ大統領が討論会前の265人から217人に減少、ロムニー候補の181人との差が36人に縮小した。選挙人獲得予想でも情勢はオバマ大統領の余裕のある優勢から接戦に転換しつつあるといえる。

図表2 接戦州における両候補の支持率の討論会前後の変化（%、主要世論調査平均）

	選挙 人数	討論会後の調査結果			10/2/2012 現在		2008
		オバマ	ロムニー	支持率差	支持率差	評価	
コロラド	9	47.3	47.0	オバマ +0.3	オバマ +3.1	接戦	オバマ
フロリダ	29	47.5	47.5	- +0.0	オバマ +3.0	接戦	オバマ
アイオワ	6	49.0	47.0	オバマ +2.0	オバマ +3.5	接戦	オバマ
ミシガン	16	48.5	45.5	オバマ +3.0	オバマ +10.0	優勢	オバマ
ミズーリ	10	世論調査なし			ロムニー +5.0	接戦	マケイン
ネバダ	6	47.0	46.6	オバマ +0.4	オバマ +5.2	接戦	オバマ
ニューハンプシャー	4	48.6	46.8	オバマ +1.8	オバマ +6.0	接戦	オバマ
ノースカロライナ	15	41.0	50.0	ロムニー +9.0	- +0.0	接戦	オバマ
オハイオ	18	49.0	45.3	オバマ +3.7	オバマ +5.5	優勢	オバマ
ペンシルバニア	20	49.0	45.5	オバマ +3.5	オバマ +8.0	優勢	オバマ
バージニア	13	47.5	48.0	ロムニー +0.5	オバマ +3.7	接戦	オバマ
ウィスコンシン	10	50.0	48.0	オバマ +2.0	オバマ +6.7	優勢	オバマ

(注) 討論会後は10/4以降に実施された調査の平均。10/2はRCP(Real Clear Politics)の数値と評価。(資料)RCP

もっとも、オバマ陣営から見て支持率が逆転したか横ばいになったのは3州のみ、他はリードが縮小するにとどまっているので、今日選挙があれば接戦州の大半はオバマ大統領が勝ち、選挙人獲得数も過半数の270人を超える。その意味では、リードは縮小したが、選挙人獲得予想でみたオバマ大統領がわずかだが優勢である。ロムニー候補にとっては、今後、州単位の世論調査でも全米の支持率のような強さが出てくれば選挙人獲得予想の逆転もあり得るが、後が続かないのなら逆転勝利に向けてもう一押しが必要ということになる。

4. なぜロムニー候補は圧勝したのか

前回報告では、ロムニー候補が失速し、今回の討論会でサプライズ、すなわちロムニー候補が討論会で極めて優れた、オバマ大統領を圧倒するパフォーマンスを視聴者である有権者とメディアに見せつける必要があると説明した。そして筆者は、その可能性が低いとみていたとも述べた。しかし、結果としてロムニー候補は起死回生の結果を残し、選挙戦は一挙に大接戦に戻った。筆者の見通しはなぜ大きく外れたのか、その反省と今後の展開を予想し直すための前提作りを兼ねて、ここでロムニー候補の勝因を整理しておく必要がある。

(1) 過信されたオバマ大統領の対応能力

主要メディアや識者は、ロムニー候補とオバマ大統領の勝敗を分けたのは、討論会に向けた準備の差であるとの認識ではほぼ一致している。しかし、挑戦者であるロムニー候補には8月から討論会の準備に取り掛かる時間的な余裕がある一方、現職の大統領と大統領選の候補者という二つの役割を担うオバマ大統領が多忙を極めていたことは誰の目にも明らかであった。また、前年から予備選挙で数多くの討論会を経験し、対立候補からの激しい攻撃にも慣れている挑戦者に対して、現職の

大統領は討論から4年近く遠ざかり、討論の技能がどうしても鈍ってしまう。しかも大統領は、野党からも敬意を払われる立場であるために、徐々に自分が攻撃されると思わず気後れしてしまう。実際にオバマ大統領の討論会での話しぶりは、これまで記者会見など即答が求められる場面と同じく、冗長で話が長くなりがち、「大学教授のよう」であった。

過去にも、そうした理由から1984年のレーガン元大統領、92年のブッシュ元大統領や2004年のブッシュ前大統領などが初回の討論会で敗れた例があることは、今回、一部では語られていた。しかし、オバマ大統領には08年の大統領選において3回の討論会に全勝した実績があること、これまでのロムニー陣営の選挙戦に失敗が多く自滅の様相を呈していたことから、オバマ大統領が現職大統領の失敗例に加わると予想したメディアも識者も少なかった。オバマ大統領の対応能力を過信し、ロムニー候補を過小評価していたわけである。筆者もそのように見ていた。先見の明があったのは、前回報告で紹介したクリスティー・ニュージャージー州知事など、ごく僅かだった。

(2) ロムニー陣営の周到な準備とロムニー候補の高い表現能力

ロムニー陣営は、全国党大会の演出・進行では躓いたが、今回の討論会には万全の準備で臨んだ。それは、ロムニー候補の討論会での冒頭からの発言や振る舞い、表情をみれば明らかだった。

討論におけるロムニー候補の発言の多くは、これまでの選挙運動からの抜粋であり、その趣旨に新味はなかった。報じられた討論の要旨をいくら眺めても、ロムニー候補が圧勝した理由は分からないだろう。陣営が工夫したのは、趣旨を表す「台詞」を、視聴者が理解できる簡潔な表現と歯切れのよい言葉に差し替え、聞き手の心に残る言葉を散りばめることだった。表現の改善の対象はロムニー候補の表情や姿勢、大統領に相応しい振る舞い、発言に込める熱意等にも及んでいた。

優れた原稿があり自らが攻める立場であれば、ロムニー候補はベイン・キャピタルの経営者時代から発揮してきた、交渉や対話の相手を納得させることができる高い表現と説明の能力が活きてくる。守勢に回ることが多かった共和党の予備選挙での討論会、演説原稿の作成に失敗があったといわれる全国党大会での指名受諾演説ではロムニー候補のパフォーマンスは、あまり冴えなかった。しかし、練り上げた原稿と十分な練習量があり、しかも自らにはオバマ大統領の実績を攻撃できる挑戦者の有利さがあった。

ロムニー陣営は、オバマ大統領の攻撃への備えも十分だった。象徴例が減税を巡る議論の応酬である。オバマ大統領は、討論の中でロムニー候補の減税策を取り上げ、富裕層の減税額が多く中間層の負担が増す、完全実施すれば今後10年間の税収が5兆ドル減って財政を圧迫すると批判した。どちらも既報の中立的なシンクタンクによる分析結果に基づいていたが、ロムニー候補には想定内だった。同候補は5兆ドルも税収を減らす減税案など考えていないと大統領の攻撃を交わした。続いて、自らの減税案についてオバマ大統領から批判を受けた部分に限って反論する。税率引き下げの財源は税控除の制度上の抜け穴を埋めることで捻出するから税収は減らない。中間層の利用が多い税控除は守るが、2.5~5万ドルの上限を設けるので中間層以下の負担だけが減る。

翌日以降の各種メディアの事実検証の記事は、ロムニー候補が示した減税案の内容を厳しく批判した。従来案と同様に詳細を欠き、本当に5兆ドルかからないか検証は不可能。やむなく蓋然性の高い仮定を評価する側で設定すると、同候補の主張は計算が合わない。しかし、そのような減税案を討論会で初めて聞かされても、オバマ大統領は即座に誤りとは言い返せない。むしろロムニー陣営は、オバマ大統領がすぐに否定・反撃できないように曖昧な対応を用意していたのである。そこには、討論会は有権者に自分の方が対立候補より優れていることを示す場であり、相手と建設的な議論をする場ではない、相手への誠意など不要というロムニー陣営の割り切りもあると考えられる。オバマ大統領はロムニー候補の対応にあきれて追及する意欲を失ったとの見方もあるが、ロムニー陣営にはそこまで読んでいた可能性も、そこまでの両候補のやり取りが政策を知らない有権者にロ

ムニー候補の方が政策に精通している印象を与えるという計算もあったと思われる。

こうしたロムニー候補の念入りな準備と豊富な練習量、自らの優れた表現能力などが相まって、結果をもたらしたことは、前述のピュー・リサーチ・センターの調査結果が示している。「どちらの候補者が新しいアイデアを持っているか」という問いではロムニー候補がオバマ大統領を7%ポイントも上回り、財政赤字の削減、雇用環境の改善、税制見直しへの期待でもロムニー候補がリード。オバマ大統領がリードを保ったメディケアや医療保険への対応でも支持率差は大幅に縮小。今回の討論会の話題にならなかった外交の政策判断でもオバマ大統領との差が縮小したほどである。筆者が見ていても、討論会の時点では8%台の高失業が続いてい経済運営や巨額の財政赤字に対する批判、医療保険改革と金融規制改革に対する批判、規制緩和と小さな政府を求める持論などは、説得力があった。

(3) ロムニー候補の討論会での穏健派への突然の回帰、オバマ大統領は「当惑」

ロムニー候補の万全の準備は、今回の討論において同候補が突然、これまでの保守的な主張を控え、穏健な主張に転換するという挑戦的な戦略を採用したことにも表れていた。減税では富裕層ではなく中間層を支えると明言し、トリクルダウン理論（富裕層の所得が増えればやがて低所得層にも波及して経済が活性化するという理論）を「米国にとって正しい政策ではない」と言い切る。社会保障もメディケアもは守るし、オバマ政権が成立させた医療保険改革法は廃止するが、既往の症状を保険でカバーする条項は独自の改革に残す。これまで自己否定してきたマサチューセッツ州で自らが導入した皆保険制度を突然肯定する。規制がなければ自由経済は成り立たないと言い、金融規制は必要と認める。全てロムニー候補の討論会での発言である。ロムニー候補が同じことを共和党全国党大会の指名受諾演説で語れば、党大会では保守派が怒り、大混乱に陥っていただろう。討論会を視聴していた筆者も、ロムニー候補の豹変ぶりには驚きを隠せなかった。

逆に、ロムニー候補のこれまでの発言を知らない有権者が討論会を見ていたなら、ロムニー候補は穏健派であり、オバマ大統領と政治的な立場は大して違わないという印象を持ったはずである。ロムニー候補が大統領になっても政策の激変はないだろうと考えた有権者、「47%失言」のロムニー候補とは随分違って、この話しぶりなら安心できると思った有権者は少なくなっただろう。ロムニー候補が支持率でオバマ大統領を逆転した理由の一つも、この穏健派のアピールが効いたとの見方は多い。

ロムニー候補はマサチューセッツ州知事時代までは共和党内では穏健派の位置付けであったが、08年の大統領選の共和党の予備選挙で早期に敗退を喫した後、急進保守派が影響力を強めている同党内において穏健派では指名を得られないと悟り、自らの主張や思想を共和党の主流である保守派の求める方向に修正し、自らも保守派であると訴え続けてきた。しかし、ロムニー陣営はオバマ大統領に追いつくには、無党派層の支持の拡大が不可欠であり、そのためには穏健派への回帰が必要であると決断したのだろう。一部のメディアは、アン夫人などロムニー候補の家族が、同候補の本来の姿であるという穏健派への転換を陣営内で強く求めたとも報じている。

穏健派への回帰は、タイミングを誤れば保守派から激しい反発を受ける恐れもある。実際、後から振り返れば、討論会への準備において、ロムニー候補は保守派に転換を悟られないように曖昧な表現となるように言葉を選び、具体策の提示は避けるなど、念入りに準備を進めたと思われる。皮肉にも、今のところはその戦略が奏功していることは、共和党内や保守派の間で、いまだにもロムニー候補が穏健化したか保守派のままであるかを巡って見解が分かれていることが示している。

さらにロムニー陣営にとっては、穏健派への回帰には討論会でオバマ大統領を「煙に巻く」狙いもあったと思われる。実際、実務型の中道政治家のような主張を重ねるロムニー候補に対して、オバマ大統領は明らかに当惑していた。大統領は、選挙で勝つためなら自らの主張や政治的立場を躊

躊躇なく転換できてしまうロムニー候補にあきれ、減税案のやり取りのときと同様に士気が低下して、同候補を追及する意欲を失ってしまったようでもあった。前述のように討論会でオバマ大統領が熱意を欠くようにみえた一因も、ここにあったと思われる。オバマ大統領がこのロムニー候補の変化にどれだけ驚いたかは、討論会翌日の遊説において、「昨夜の討論会ではロムニーと自称する別人が目の前にいた、本物のロムニー候補はコストが5兆ドルの減税案を提案している」とジョークを飛ばしたことをみても明らかである。

(4) 議事進行の主導権も握ったロムニー候補

十分な準備で討論会に臨んだロムニー候補には余裕があり、オバマ大統領だけでなく司会のジム・レーラー氏からも議事進行の主導権を奪うことに成功したことも、同候補の圧勝の一因になった。ロムニー候補の減税案の修正や穏健派への主張の回帰は、討論会へ向けて準備されていたとはいえ、政策として十分に整えられたものではなく、攻撃を受ければ矛盾が露呈するリスクは十分にあった。そうした展開を防ぐためにも、ロムニー候補は防戦に回らざるをえない話題になることを可能ながざり避け、オバマ大統領に対する攻撃が多くなる局面を出来るだけ続けるという討論の流れを作ることに成功した。ただ、これは熱意を欠いたオバマ大統領と受身の対応を続けたレーラー氏が主導権をロムニー候補に譲ってしまったという面もある。レーラー氏は大統領候補討論会の司会を数多く務めてきたが、今回は同氏が幅広く多様な論点について二人の候補者の考えを引き出すという役割を果たし切れなかったとの批判が少なくなかった。

5. オバマ大統領にとっての敗因

(1) 攻撃不足と討論会の品格維持へのこだわり

オバマ大統領の熱意のなさは、ロムニー候補に対する攻撃不足という非常に手痛いミスを招いた。修正減税案も、専門家は相変わらず巨額の税収減が生じる可能性が高い、計算が合わないと批判しているし、討論会の場で詳細を追及すれば矛盾が露呈したとの見方は多い。だが、討論会でのオバマ大統領は、ロムニー候補に5兆ドルは誤りと言われ続けると、追及を止めてしまった。その後のロムニー候補の突然の穏健派への転換を示す発言にも隙は多数あった。ロムニー候補の医療保険改革に対する批判は、事実でないと何度も否定されている「メディケアから7,160億ドルを奪う」の繰り返しなど、準備しても新たな攻撃材料が見つからなかったことを示す苦しい内容もあった。だが、オバマ大統領はロムニー候補をやり込める場面はなく、不満の表情を示しつつも途中で攻撃を止めてしまう場面が目立った。

その結果、ロムニー候補は自らの政策や主張の転換の詳細を示すように求められて矛盾が露呈する展開に陥らずに済み、討論会の中での防戦の部分が無難に乗り切った。逆に攻撃を受ける場面が多かったオバマ大統領も、それに反論できない場面はなかった。致命的なミスといえる発言も、討論会での敗戦を象徴するような場面もなかった。それでも攻撃的な場面をより多く作り、発言の歯切れのよさや明快さ、自信に満ち溢れた表情や姿勢などでオバマ大統領を上回り、得点を重ねたロムニー候補が優勢勝ちしたといえる。

オバマ大統領が、大統領候補の討論の品格にこだわったことも誤りだったとの指摘が多い。「47%失言」やロムニー候補の所得開示など討論会の前選挙戦で注目を集めた論点は、今回の討論会では全く出てこなかった。討論会後の報道によれば、オバマ陣営が大統領候補の討論会に適切な論点ではないし、問題自体は有権者によく浸透していると判断したとのことであった。しかし、多くのメディアや識者は、これらの論点は大統領の資質に関わる重要な問題であり、討論会で取り上げないというオバマ大統領の判断は誤りだったと批判している。ちなみに、討論会で47%失言の弁解を回避できたロムニー候補は、討論会の翌日に同失言を「自分は完全に間違っていた」と余裕を持って撤回している。

オバマ大統領は、好感度でロムニー候補を大きくリードしていたことから、攻撃によりその優位を損なってはいけない、選挙戦でのリードも大きいので、落ち着いて安全に勝つことにこだわったことが響いたとの声もある。しかし討論会である以上、攻撃を回避し続ける選択などあり得ない。好感度を傷つけないで相手にダメージを与えるには、どこまで攻撃に踏み込むべきかなどの判断が事前に詰めきれていなかったということであり、オバマ大統領の準備不足の一面だったといえる。

(2) 8%台の高失業という失点の重さ

討論会の前までは、前回報告で紹介したように、オバマ大統領の4年間の経済運営について、金融危機を乗り越えて現在の水準まで戻してきたことを強調するオバマ陣営と、現在の経済活動の水準の低さが失政の表れであると全面否定するロムニー陣営の主張の対立があった。そしてどちらの主張が有権者の支持を得られるかが、選挙戦にも大きな影響を与えるとの見方が多かった。

少なくとも今年の夏までは、過去を振り返らない傾向が強い多くの有権者は、金融危機を止めたという3年前の実績を有権者に訴えるオバマ陣営の主張よりは、足元の経済と雇用の低迷を非難して経済運営の担い手の交代を求めるロムニー陣営の主張に共感していた。それは、世論調査における「どちらの候補の経済運営が期待できるか」という問いについて、ロムニー候補の支持がオバマ大統領を数%ポイント差で上回り続けてきたことに表れていた。しかし最近の同調査の問いの回答は、オバマ大統領の支持がロムニー候補と並びか抜くケースが目立つようになり、有権者がオバマ陣営の主張を受け入れ始めたとの評価をする選挙専門家も増えていた。

しかし、今回の討論会では、この時点で8%という歴史的な高失業率の長期化や多数の失業者の存在を受け入れられない、オバマ政権が誤っているというロムニー候補の強い非難が、その準備された発言の明快さと力強さもあって説得力を持ち、ロムニー陣営が明らかに巻き返した。それに対するオバマ大統領の反論も、やはり8%台という高失業率への気後れがあったのだろう。言葉に詰まったり、ロムニー候補とは逆に歯切れと熱意を欠いた発言が目立つことで、有効な反論にならず、かえってロムニー候補の主張の説得力を高めた。

オバマ陣営の反転攻勢は、民主党全国党大会でのクリントン元大統領の名演説から始まり、討論会前まではモメンタムを保ってきたようにみえた。しかし、それは経済運営を巡る両陣営の直接対決に勝って得たものではなく、むしろ、「47%失言」等でロムニー陣営の発言力が低下している隙に主張を広げたという傾向が強かった。その意味では今回の討論会は、両陣営の経済運営を巡る主張が初めて直接対決する場面であった。その結果が上述のロムニー候補の「優勢勝ち」であった。勝因はロムニー陣営の準備のよさも大きいですが、やはり8%台の高失業が3年半近くも続いているという現実の重さであろう。逆に言えば、オバマ大統領に欠けていたのは、深刻な金融危機を乗り越えてここまで米国経済を立て直した実績を、8%台の高失業という現実よりも説得力を持たせる言葉で討論会で語るための準備だった。

もっとも今回の討論会は、失業率が8%台で再選された大統領がいないという現実には偶然ではなく、それだけ大きな失点を抱えた現職大統領が、形勢を挽回する新たな大きな得点を上げることが難しいという確率の高さを認識させる機会にもなった。それでもオバマ大統領がロムニー候補をリードしているという事実は、オバマ大統領がロムニー候補の自滅にも救われて着実に得点を上げて、シナリオは低い確率の方に進みつつあることを示してはいる。だが、今回の選挙戦の最後まで経済運営の大きな失点がオバマ陣営にとって重い負荷になる可能性が高いこと、その失点を抱えているのに選挙戦を早期の楽勝に持ち込むことは極めて難しいことを討論会でオバマ陣営は認識させられたといえる。その後、5日に発表された雇用統計では9月の失業率が7.8%と発表され、8%を割り込んだが、歴史的な高失業であることには大差がないため、オバマ大統領の立場を大きく改善することにはならないだろう。

6. 展望と注目点：最終盤での大接戦、今後3回の討論会から目を離せない

(1) ロムニー候補が支持率以外に得たもの：好感度、女性の支持、経済運営への期待

ピュー・リサーチ・センターの調査結果は、支持率の逆転以外にも、ロムニー候補が四つの大きな成果を得たことを示している。一つは、弱点であった好感度が前回の45%から50%に跳ね上がってオバマ大統領を1%上回ったことである。他の世論調査でも好感度は軒並み上昇している。これまでの選挙戦では、ロムニー候補は、オバマ陣営の中傷広告に対抗しきれず、中間層の有権者から冷酷な企業経営者、中間層のことなど理解できない富裕層というイメージを持たれがちだった。しかも、「47%失言」がその悪いイメージを増幅させていた。だからこそ反動も大きく、討論会でのロムニー候補のパフォーマンスによって、多くの有権者のロムニー候補への印象が変わったのだろう。

もう一つの弱点であった女性の有権者からの不人気も、大幅に改善した。オバマ大統領とロムニー候補の女性の支持率差は前回の18%ポイントから今回は3%ポイントに縮小している。民主党系の世論調査専門家によれば、独身女性の支持率の上昇が顕著であるという。そして、この変化には熱意を十分に示さなかったオバマ大統領への失望と安心できるリーダーという印象を残したロムニー候補の落差の大きさも反映されたのだという。

第三の成果は、盛り上がりを欠いた共和党全国党大会とその後のロムニー候補の苦戦で不満を強めていた共和党と保守派の選挙への熱意を一気に高めたことである。選挙戦の最終盤での自派の熱気はロムニー候補自身への強力な支援となるだけでなく、議会選での共和党の勢力の維持・拡大にも作用することが期待できる。逆に民主党はオバマ大統領の失敗に意気消沈が伝えられているだけに、ロムニー陣営と共和党が相対的にかなり有利になった可能性も考えられる。

「経済運営への期待」について、オバマ大統領に奪われた地位を奪還したことも重要な意味がある。どちらの候補が雇用情勢を改善できるかという問いに対しても、前回はオバマ大統領が1%ポイント上回っていたが、今回はロムニー候補が8%ポイントのリードであり、世論は夏以前の経済運営ではロムニー候補の方が期待できるという評価に戻ったと思われる。今回の大統領選における有権者の関心が最も高い問題は一貫して経済と雇用であり、ロムニー候補が共和党の候補者選を勝ち抜けたのも、企業経営者の経験が経済運営に活かされると思った支持者が多いからであった。しかしロムニー候補はいつになっても具体的な経済政策を示さなかったことも響いてか、景気が回復したわけでもないのにオバマ大統領の経済運営に期待する有権者の方が多くなっていた。外交や他の政策では、オバマ大統領を超える支持を得ることは絶望的であっただけに、経済運営に関する期待で上回ることは反転攻勢の足掛かりとして必要不可欠であった。

(2) 失業率8%割れと支持率上昇、整い始めたオバマ大統領の挽回の土台

一方のオバマ大統領にも、討論会での惨敗の後に二つの朗報が届いている。一つは9月の失業率が09年1月以来の7.8%に低下したことである。それでも依然として水準は高く、有権者に自らの経済運営の正しさをアピールする材料として使うことは難しいが、ロムニー陣営の攻撃材料の一つを封じたことは確かである。「43カ月も8%以上の失業率が続いている」というロムニー候補の決まり文句は討論会でも多用され、事実であるために有権者に響き、同候補の討論会での圧勝にも寄与した。このフレーズを使えなくなったロムニー候補や共和党は、「不完全雇用率は依然15%近い」などと言い換えるようになったが、分かりやすさでは失業率に遠く及ばないことは明らかである。またオバマ陣営にとっては、討論会での惨敗の後に8%台の失業率が続くことがあれば、深刻なダメージを受けていたはずであり、それを回避できた意味は大きい。逆にロムニー陣営と共和党にしてみれば、好機を逸したという思いが強いはずである。統計発表後に、共和党支持者である元GE・CEOのジャック・ウェルチ氏などが、論外であるオバマ政権による統計操作への疑念を表明したのも、いかに悔しかったかの表れであろう。

もう一つの朗報は、ギャラップ社の発表するオバマ大統領の支持率（Job approval rate）が討論会後に上昇して 53%に達する一方、不支持率は 42%に低下していることである。オバマ大統領の信任投票という意味の強い今回の選挙において、現時点で有権者の過半の支持を得ているオバマ大統領が、このままロムニー候補に敗れる展開は予想しにくい。RCP の主要調査平均でも同支持率は 50%弱あり、ギャラップ社の結果が異常値という訳ではない。むしろ、上記の失業率低下などオバマ大統領の実績を有権者の多くが評価している表れであり、今後の選挙戦、その中でも 2 回あるロムニー候補との討論会においてオバマ大統領が失敗を繰り返さなければ、支持が上向く可能性の高さを示しているとみるべきである。

(3) ロムニー候補は、穏健派回帰のコストを払わされる可能性あり

ロムニー候補の方も、好感度と女性の支持という従来の弱点を相当挽回し、今後の選挙戦での逆転への土台は整っているように見える。しかし、ロムニー候補は後がなかった第一回の討論会で挽回するために、突然の穏健派への回帰というリスクの大きい選択に踏み切っている。選挙戦の終盤での路線変更が、残り 4 週間弱の選挙戦で矛盾を露呈する恐れは小さくない。第一に、急進保守派であり、その方向の政策の実績もあるライアン副大統領候補との政策の整合性をどのように保つか。少なくとも本日 11 日の副大統領候補討論会において、バイデン副大統領はライアン候補に対して、同候補が主導したメディケア民営化を含む急進保守的な下院予算案と、ロムニー候補が討論会でつぶやいた穏健な政策のどちらの実現を目指すのかを、執拗に追及するだろう。バイデン副大統領は、オバマ大統領の失敗を繰り返さないためにも、容赦ない攻撃を展開する可能性が高い。それに対してライアン候補は、ロムニー候補の現在の主張に従えば、変節したという批判を受ける恐れがある一方、持論を守ればロムニー候補との主張の不一致が問題になるという難しい立場にある。過去の大統領選では、副大統領候補の討論会が選挙戦に与える影響は皆無に近かったともいわれるが、今回は有権者の討論会への関心が高まっているだけに、過去とは違う展開となる可能性もある。

ロムニー候補自身も、今後はオバマ陣営による攻撃だけでなく、支持を受ける保守派からの監視を受ける立ち場になる。オバマ大統領は、既にメディアや専門家が問題視している政策の整合性、穏健派への回帰の前後の主張の矛盾などを第二回の討論会以降は、厳しく追及してくるだろう。第一回のようにオバマ大統領の攻めが甘く、ロムニー候補が容易に交わせる展開には持ち込めないのではないかと。クリントン元大統領も、オバマ大統領の応援演説の中で、ロムニー候補の転向は願ってもない好機とばかりに、はしゃぐ様子をみせていた。一方の保守派も当面は大統領選に勝つことが優先であると自覚していることと、大統領選の勝算からの高揚感が効いて、ロムニー候補の転向を容認するとは思われるが、それでも譲れない一線はある。現に 9 日にはロムニー候補が妊娠中絶に関しても穏健派に近い主張をしたところ、自陣営が慌てて保守派の立場を守るとの見解を出して否定するなど、今後の保守派との関係の難しさを示唆する現象が早くも生じている。ロムニー候補は、共和党の指名獲得のために穏健派から保守派に転向したことだけでも、風見鶏（flip-flop）との批判を受け、保守派は本音では同候補を受け入れていないという見方は多い。その上に、今度は本選挙の勝利のための穏健派回帰である。保守派がロムニー候補の無定見な政治姿勢のシフトを選挙戦の最後まで容認できるのかは注目されるし、オバマ陣営も無定見を大統領としての資質への疑問と絡めて攻撃し続けるだろう。

(4) ロムニー候補があまりに恵まれた第一回討論会、今後の持続性に疑問

第一回の討論会は、ロムニー候補に十分な準備の時間があり、経済という得意分野がテーマであるという有利さがあり、討論が始まるとオバマ大統領が一方的に自滅したという運のよさもあった。これに対して 16 日の第二回は会場から質問を受けるタウンホール・ミーティング形式であり、アドリブが得意でないといわれるロムニー候補は、最初から最後まで余裕を保てた第一回のようにはいかない可能性がある。22 日の第三回も、ロムニー候補が得意でない外交政策がテーマであるという

懸念がある。ロムニー候補は第三回討論会への布石として 8 日に外交に関する演説を行ったが、外交専門家の多くは、オバマ大統領の外交政策を批判するばかりで、実質のない空虚な演説という酷評が少なくなかった。これはロムニー候補を支える外交ブレーンの能力への批判も込められており、第三回の討論会にも響いてくる可能性がある。さらに、オバマ大統領が第一回のようなひどいパフォーマンスを繰り返す可能性は低く、攻撃的になる、話し方を修正するなど、挽回への準備をしてくるはずである。

(5) 当面の展望：相対的に可能性の高いのはオバマ大統領の再選だが、今後の討論会が最重要

以上のように選挙戦の最終盤が大接戦となった上に、討論会が選挙戦に従来以上に影響を与えやすい状態になっている中で、本日 11 日の副大統領候補討論会、16 日と 22 日の大統領候補討論会と重要日程が続く。それぞれの討論会は、やはり前述のようにオバマ陣営とロムニー陣営それぞれに有利・不利な要素が多く、先行きは非常に不透明である。そうした視界不良の状態の中で、今後も大きく変化しないと言い切れるのは、現時点で一方の候補が優勢になっている州の情勢とその合計の選挙人獲得予想ぐらいである。その数ではオバマ大統領がロムニー候補を上回っていること、加えて接戦州のいくつかはオバマ大統領が最後まで守り切れるリードがあると思われるために、多くの選挙予想は 2 対 1 程度の確率でオバマ大統領が再選されるとみている。

我々も、現時点での標準シナリオをあえて設定すれば、次のようにまとめられる。まず、オバマ陣営が本日から計 3 回の討論会では、第一回のような失敗を繰り返す可能性はさすがに低く、一定の攻勢に出る可能性が高い。逆にロムニー陣営は第一回のような好条件は揃わないために、圧勝はなく、むしろ負けるか引き分けとなる討論会が増えると思われている。その見通しを全米の支持率や州単位の見通しと選挙人獲得予想に反映させると、オバマ大統領の再選の可能性がまだ 5 割をぎりぎり上回っているのではないかと考える。ただし、このシナリオは相対的に見て最も蓋然性が高いということに過ぎない。ロムニー候補が上記の予想を超えて、第二回以降も安定したパフォーマンスで乗り切り、オバマ陣営がロムニー候補が抱え続ける矛盾を攻め切れない可能性もある。その場合は、選挙戦の最後にはロムニー候補が大統領らしくみえるようになり、オバマ大統領との交代が適切な選択とみえるようになっているだろう。

最終盤での大接戦である以上、本日 11 日の副大統領討論会からのあらゆる場面に、今後の選挙戦の流れの変化を形成する要素が潜んでいる。だからこそ、今後はこれまで以上に 3 回の討論会の議論を注意深く見続ける必要がある。我々の報告も、今後の討論会を単位に発行していきたい。

なお、本日 11 日からの 3 回の討論会の速報、それ以外の重要な変化が生じたとき我々が判断した場合は、当報告の Twitter でも報告していく。ご関心のある方は下記の URL からご参照いただきたい。

丸紅ワシントン報告@MWR2008 <http://twitter.com/MWR2008>

以上／上原・今村

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料の提供する情報の利用に関しては、すべて利用者の責任においてご判断ください。当資料に掲載されている情報は、現時点の丸紅米国会社ワシントン事務所長の見解に基づき作成されたものです。当資料は信頼できるとされる情報に基づいて作成されていますが、当事務所は情報の正確性あるいは完全性を保証するものではありません。当資料に記載された内容は予告なしに変更されることもあります。当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は、出所をご明記ください。